

Predation

栞川七海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通り、捕食をモチーフにしたじめの話です。

主人公どころか登場人物皆喋りません。

セリフ、まさかの1箇所だけです。

※初投稿作品です。

目
次

Predation

ある日の朝、いつもの登校路で一羽の小さな雀を見かけた。

アスファルトで固められた真つ黒な道にばら撒かれていた、米粒をついばみに来たのだろう。

必死に米粒を拾い食べる姿は、雲一つない晴天に機嫌を悪くしていた私を癒してくれた。

しかしその時、突如として道端から黒い影が飛び出してきた。それは黒猫であった。

素早く雀を捕えた黒猫は、すぐさま道端へと隠れる。

そしてそこで、鋭い爪と歯を駆使して雀を食べ始めた。

べちゃ、ぐちゃと小さな音がする。

雀は最後まで反抗したものの、自然界のルールに逆らうことはできず、その命を散らした。

私は、雀が食べ尽くされるその時まで、その様子を見守っていた。雀が食べられていくその光景は、まさにグロテスクと言うべきだろう。

しかし、そのグロテスクな光景と反対に、私の心は昂っていた。

この光景は、ヒトの世界によく似ている。

今日も上靴がなかった。

―バケツの中で雑巾と一緒に水浸しになっていたから、来賓用のスリッパを使った。

今日も机に落書きがされていた。

―油性ペンで書かれていたから、とりあえず壊れてガタガタの予備机を使った。

今日もロッカーにゴミが詰められていた。

―腐臭が酷かったから、ビニール袋に入れて焼却場に持っていった。

今日もいつもと何ら変わりない日々、人はこれをいじめと言う。

私は焼却炉の中で燃え尽きていくゴミを見つめながら、ここに飛び

込んだ時のことを考える。

所詮この世は、どこも弱肉強食の世界なんだ。

私という弱者は、クラスメイトという強者に食われる運命にあるのだ。

だから私はあきらめた。

これが普通なのだとかきらめて、淡々と毎日を過ごしてきた。何をされても反応しない。

けれどそれが気に食わないと罰を受ける。

その生活が変わることはない、私は知っている。

でも、どんなに諦めていても、変わってほしいと願ってしまうのは人の性だ。

願ってしまうのも、期待してしまうのも、全部…。

— だけど、その願いも期待も、すべて無意味なものに変わった。だってあの人達は、私を殺そうとした。

4階から窓の外を見ていた私の背中を、あの人達は思い切り押し込んだ。

転落防止の手すりは故障中で、上にあげられていた。

だから押された私の体は、窓の外に向かって思い切りつんのめった。

足も少しだけけれど浮いていた。

もしかしたら、本当に落ちていたかもしれない。

なのにあの人達は、驚き戸惑う私の姿を見てクスクスと笑っていた。

「早く死ね」とでも言わんばかりの笑顔で…。

気付けば私は、屋上のフェンスを越えた先に立っていた。

数センチメートルの床が、私の命をつないでいる。

目の前に広がる風景は、とても美しかった。

先ほどまでは見えていた太陽も黒い雲に隠れ、光は遮られる。

私が飛び降りようとしているのを後押しするかのよう、強い風が吹き付ける。

「…よし」

私は覚悟を決めて、飛び降りようと下を見た。

その時、不意に頭をあの一ある日の雀」がよぎった。

あの雀は、命の果てまで黒猫に反抗し続けていた。

その雀が、なぜか自分と被ってしまった。

私は思わず笑う。

私は空へ踏み出し、勢いづけて飛び出す。

身体の降下が始まり、私は目を閉じた。

最後まで生きようとしたあの雀と自分が被るだなんて、そんなこと。

——生の途中であきらめて死ぬ私は、あの雀よりも弱いのに。

Fin.